聞き書き
この人のわが町へ！
その3
FUCHU
［東京都府中市］

府中は、武蔵国の国府が置かれた古い歴史をもつ土地柄。変えてはいけないものと変えなくてはいけないものを見極めて、人を大切にし育てていく、ソフトパワーで魅力的なまちづくりをしたいですね。

野口忠直

東京都府中市長（昭33経）

野口忠直（のぐち・ただなお）
昭和10年2月19日東京都府中市生まれ。明星高校より昭和29年学習院大学政経学部経済学科に入学、同33年卒業。家業の合名会社野口酒造店に入社し、副社長を経て代表社員社長に。仕事の傍ら、府中市社会教育委員、大國魂神社奉賛会長としても活動。昭和55年9月25日から平成7年7月31日まで4期にわたって府中市収入役を務める。平成12年2月10日府中市長に就任、現在に至る。大学では国劇部、観世会部に所属しながら、落語研究会の創設に加わる。任意の集まりだった府中桜友会会長から、平成13年2月10日の府中桜友会正式発足時に、顧問に就任。

不易と流行。変えてはいけないものと、変えなくてはいけないものと言うのでしょうか。その境をしっかり見極めて、今、行政に当たっていくことを心がけているのですが、これは学習院時代に児玉幸多先生から学んだことでした。

私は、府中にある明星高校から学習院大学へ進みました。親戚が入学していて勧められたこともありますが、高校時代に児玉幸多先生の本をよく読んでいて、ぜひ先生に教わりたいと思ったのです。

府中市役所の隣に大國魂神社（おおくにたまじんじゃ）という大きな神社があるのですが、私の家は、祭神の大国主神がここにいらっしゃる時に宿泊する〝仮屋〟だとされ、今でも神社の例大祭の折に〝野口仮屋の儀〟という祭礼をしているんです。そんなこともあって、昔から歴史にはたいへん興味があったのですね。

当時はまだ学習院に史学科がなくて、児玉先生は政経学部経済学科にいらっしゃいました。ゼミはもちろん児玉先生のところに入れていただきましたし、先生の講義は全部聴きました。児玉先生は史料に忠実な学風で、厳しかったですね。古文書を正確に読まなければならないのですが、あれがなかなか読めるようにならない。古文書とは格闘しましたよ。

当時の学習院は、安倍能成院長をはじめ、清水幾太郎先生ら、すばらしい先生方がきら星のごとくいらっしゃいました。院長官舎で、院長先生直々に講義を受けたこともありましたよ。

――クラブ活動はどんなことを。

児玉先生の講義を受けて、今の日本文化の原型はほとんどが江戸時代にあるんじゃないかと思って、クラブ活動は江戸文化に関係することをやることにしました。それで、2年から歌舞伎のクラブである国劇部に入部したのです。この部は、鑑賞だけではなくて上演もするところで、三越劇場が多かったのですが、読売ホール、厚生年金会館といった外の劇場での公演もたくさんやりました。

歌舞伎を演ずるのに、発声練習もあって謡曲を習わなければいけないということで、観世会部にも所属することになり、今でもOB会には出かけています。この5年ほどの間に、両方の部が創立50周年を迎えました。国劇部の50周年は国立小劇場で『助六』をやったのですが、私は髭の意休という、仇役だけれどおもしろい役をやりました。現役の時は、『一ノ谷嫩軍記　熊谷陣屋の段』や『忠臣蔵　一力茶屋の場』なんかが思い出深いですね。

――先ほどから、バリトンのお声が魅力的だなと思っていましたが。

それは、謡曲のおかげですね。おなかから声を出さなければ声が嗄れてしまいますから。今もいろいろな場所でスピーチをする機会がありますが、30分ぐらいしゃべってもなんでもありませんよ。

大学時代、寄席通いして落語も聞いていたのですが、それが嵩じて落語研究会を創ろうということになりました。それで目白には柳家小さん師匠がいるっていうことで、直接指導を頼みに行ったんですね。だから、落語は小さん直伝ですよ。

落研からは噺家がひとり、国劇部からもプロの役者がふたり、観世会部からは能楽師が4人出ています。大学で始めてその世界でプロになっているのですから、すごいです。学習院は、古典を大事にする校風があるからでしょうね。

就任後1年、野口市長の個性が市政に反映されていくのが期待される

「新しい酒というところがいいでしょう」と、市長が座右の銘とする虚子の言葉

卒業してからは、家業の酒屋に入りました。もともと神社にお仕えする家だったのですが、神社のお酒を造ってみないかということで先祖が「国府鶴（こうづる）」という酒を造るようになったのです。

その後45歳の時に、前の市長から市の収入役というのをやってみないかと言われまして。結局15年間収入役を務めたのが、行政との縁になったのですね。収入役というのは、市のお金については全責任があるので、たいへんな仕事でした。

60歳で辞めて酒屋に戻ったのですが、それからまた市長にという話になりまして。たいへんな選挙でしたが、府中桜友会の方たちやクラブのOB会にずいぶん力になっていただきました。ありがたかったですね。先輩から後輩までそれは一所懸命やってくれて、感謝しています。

市長になって1年。今、府中市をすばらしく魅力的な町にしようということで、人を大切にして、人材を育てていこうという「ソフトパワー」を掲げています。ここは、駅からいらっしゃるときにご覧になったと思いますが、美しいケヤキ並木があります。そして、なにしろ武蔵国の国府が置かれたところですから、豊かな歴史もある。そのような自然や文化を、これからの時代にどう伝え、発展させていくかが重要だと考えています。多磨霊園や府中刑務所、競馬場など、市内にはむずかしい施設も多いのですが、それをプラスに発展させていきたい。例えば競馬場には何十万という人が集まって交通渋滞などの問題もあるのですが、それをプラスの方向にもっていけないか、知恵をしぼっています。

今はなかなかプライベートの時間がもてないのですが、歌舞伎の観劇にはほとんど毎月行っています。自分で演じていたわけですから、「あそこで、ああいう仕草をするのか」なんていう見方ができて、楽しいですよ。時々、起居振る舞いがきれいだと言われることもあるのは、芝居で身につけたものかもしれません。

平成10年に、学習院の生涯学習センター「江戸文化・伝統芸能を楽しむ」という公開講座でまた学習院に通ったのですが、それも楽しかったですよ。国劇部出身の園田榮治君がコーディネートしたのですが、ああいう企画は、学習院らしくていいですね。

学習院は、古典を大事にする学校だと思っています。それを大切にすると同時に、わかりやすく伝えていくことをやっていってほしいと思います。

＊　＊

市長執務室には、直筆の「古い壺に新しい酒を」という高浜虚子の言葉がさりげなく掛けられていた。これが野口市長の願いと抱負を語り尽くしているようだった。

DATA BOX――府中市

●府中の名は、武蔵国の国府が置かれたことに由来する。昭和29年、府中町、多磨町、西府村が合併して府中市が発足。現在の人口は約22万5000人。旧甲州街道が通り、京王線、武蔵野線、南武線、また中央自動車道の走る交通の要衝。
●市の中心に、景行天皇41年（111）創建と伝えられる大國魂神社があり、5月5日に行われる例大祭は「暗闇祭」として親しまれている。また府中囃子、武蔵国府太鼓といった芸能も育まれている。平成12年には、府中市美術館が開館した。

市庁舎の隣の大國魂神社。武蔵国国府がこの近くにあったのではないかと、発掘調査も

インタビュー・構成／柳澤美樹子（昭59国）　Photographer/Kouji Yoneya